

い

やす

IYASU

やまぐち・いく 1965年、大阪生まれ。大阪教育大卒。24歳で卵巣がんを患ったのをきっかけに医療に関心をもち、92年、COML職員に。約5万3000件の電話相談のうち約2万件を担当した。患者や医療者のコミュニケーション力を高める講座の企画にも携わる。2011年8月から現職。

小学生を「賢い患者」に

子供の頃から自分の体に関心を持ち、医者にかかる際の心構えを身につけてほしいと、NPO法人「ささえあい医療人権センターCOML(コムル)」(大阪市)が、小学生向けの「いのちとからだの10か条」をまとめた。理事長の山口育子さん(48)は「写真」に、10か条に込めた思いを聞いた。(佐々木栄)



師が治療を決めていましたが、今は「患者さんは、全てを知った上で自ら選択して下さい」と言われます。あふれる情報から正しい情報を選ぶ力も必要。治療の際は日常会話よりも難しいコミュニケーションが求められます。多くを吸収する子供のうちに組み合わせる意義は大きいと思います。

小児医療の現場ではどうでしょうか。ある学会で、複数の小児科

の診察場面のビデオを見る機会がありました。3歳ぐらいの子では、医師が母親に話しかけていると泣き出す一方で、本人を見て説明すると泣かずに真剣に聞くんです。術前の手術室ツアーや、ぬいぐるみで点滴の仕方を事前に説明するなど、子供にも、理解して治療を受けてもらおうという機運が高まっています。

10か条は、どうまとめたいのでしょうか。小児科医、弁護士、大学教授らCOMLとつながりのあるメンバーで会合を重ね、1998年以降、21万部を発行した大人向け小冊子「医者にかかる10箇条」の子供版を作ることになりました。140ほどの挙がった項目から①受診時の注意②命や死③予防④薬

など10項目に絞りまし
——想定される実例は。部活動だけがをしたとします。その間にも可能なトレーニングはあるのか、早期回復のため何に気をつけるのか、もっと動きやすい包帯にかえてなど、意思表示すれば、納得のいく治療を引き出せるのではないのでしょうか。10か条の「自分がどうしたいかを伝えよう」の一例です。小学生になれば自分で症状を言えるようになってほしいですね。

10か条に託す思いは。妊娠・出産、バイク事故、若い人も患う婦人科系のがん、家族の病など、いずれ命や体について考えさせられる場面にもぶつかります。ネット世代の子供たちは絵文字やスタンプで意思疎通が完結することもあるでしょうが、医療の場ではそうはいきません。体の変化に気づき、言葉で伝え、自分で選択する。日頃から実践してほしいと願います。

「いのちとからだの10か条」

「10か条」を作ったきっかけは。

「賢い患者になりましょう」を合言葉に活動する中で、突然降りかかる病には大人もすぐに「賢く」対応するのは難しいと感じていました。もっと早い時期に「患者が主役」と自覚できれば、将来、必要に迫られても冷静に向き合えるのではないかと。長年の思いを形にしようと決めました。

治療は、医師主導から患者中心に変わりました。

私が卵巣がんを患った頃は、患者に病名を伝えず、医

NPO法人理事長 山口育子さんに聞く

小学生向けの

「いのちとからだの10か条」

- いのちとからだはあなたのもの
- 食事・すいみん・手洗い——予防が大事
- からだの変化に気づこうね
- お医者さんには自分で症状を伝えよう
- わからないことはわかるまで聞いてみよう
- 自分がどうしたいかを伝えよう
- 治療を受けるときはあなたが主人公
- お薬は約束守って使おうね
- みんな違いがあって当たり前
- だれのいのちもとっても大切

「詳しくは医療介護サイト「ヨミドクター」に掲載」

「10か条」は小冊子4万部の作成・無料配布を目指し、寄付を募っている。問い合わせはCOML(06・6314・1652)。